

打倒教科書

長瀬凌汰, 久藤佑香, 福田奏音
延岡高等学校 Nobeoka High School

Abstract

近年高校生の活字離れが進んでいることを受け、共通テストと結びつけた読書の利点を示すことで、高校生に読書の魅力を伝えることが出来るのではないかと考え、この研究に取り組んだ。

この研究によって、書籍の方が教科書よりも常用漢字の使用率が高いこと、しかし共通テストの範囲内の漢字を書籍や教科書だけで対策することは非効率だということ、近年共通テストの漢字問題の出題傾向が変化しており、知識以上に読解力が求められることが分かった。

今後の研究では、共通テストに向け、読書によってどれほど読解力が向上するのかという部分に焦点を当てていきたい。

Keyword 書籍 / 教科書 / 常用漢字

1. 序論

(1) 研究背景

近年高校生の活字離れが進んでいる。ある企業の調査によると、小学生から高校生にかけての読書量は右肩下がり、一ヶ月に一冊も本を読まない高校生は調査対象の4506人中2298人もいた。

活字離れの影響として本を読まないことで常識が身につかないことや、新聞を購読しないことで社会の動きに鈍くなることなどが挙げられる。今後の日本の文化と若者の社会で生きていく力を育むためにも若者の活字離れの問題を解決する必要がある。

(2) 研究の動機

私たち班員には読書という共通の趣味がある。そして、班員たちが日常的に小説などを読んで漢字に触れていたおかげで、模試やテストで偶然小説で見た漢字が出題され、解答できたという経験があった。そんな経験があったので、日常から漢字への接触回数が多ければ漢字の基礎力向上につながり、共通テストにも役立つのではないかと考えた。

ここでいう「漢字の基礎力」とは、常用漢字が読める力、書ける力と定義する。

(3) 現状分析

共通テストに出題される漢字問題の範囲は、原則として常用漢字2136字の範囲内であり、その音訓表に記載されているものである。

(4) 研究仮説

模試やテストで小説で見た漢字が偶然出題され、解答できたという経験から、小説などの書籍は勉強を目的として作られた教科書より常用漢字の使用率が多く、漢字の基礎力向上につながるのではないかと仮説を立てた。

2. 調査方法

(1) 材料

・国語の教科書(R4年度の延岡高校2年生が使っているもの、または1年生の頃に使っていたもの。)

・書籍

・パソコンまたはタブレット

・AIテキストマイニング(webサイト。入力した文章の総文字数を数えたり、使われている単語を品詞別に分類したりできる。また、品詞ごとに多く使用されている単語順を知ることができる。)

・常用漢字チェッカー(webサイト。入力した文章に使用されている常用漢字の種類がわかる。また、それがどの学年で学習されるものなのかや常用漢字外の漢字も知ることができる。ただし、使用されている常用漢字の数はわからない。)

(2)調査方法

(1)で述べたAIテキストマイニングに文章を打ち込み全体の文字数を調べる。次に(1)で述べた常用漢字チェッカーで文章に含まれる常用漢字数を調べる。最後に文章全体の常用漢字の割合を算出する。

(3)分析方法

- ・調べる文章の種類は、「教科書の評論」、「教科書の物語」、「書籍の評論」、「書籍の物語」の4つとする。
- ・文字数、常用漢字数は、それぞれの項目ごとに調べた文章全ての総数とする。
- ・割合は、それぞれの項目で調べた文章1つ1つの割合の平均とし、少数第一位で四捨五入する。

(2)結果or調査(実験)結果2

	文字数	常用漢字数	割合
教科書	17279	4499	26%
書籍	18854	6539	34%
教科書	22272	4420	19%
書籍	13815	2971	22%

結果は上図のように、文字数では教科書の物語が1番多く、書籍の物語が1番少ない。常用漢字数では書籍の評論が1番多く、書籍の物語が1番少ない。また、研究した書籍や教科書の単元のうち、最も割合が高かったのは、書籍の評論、西田幾多郎作の『デカルト哲学について』の34%であった。最も少なかったのは、教科書の物語、梶井基次郎作の『檸檬』の15%であった。

上図より、割合はほとんどが30%に近づいていることがわかる。

(3)考察

結果より、教科書の1つの単位には平均して約20～30%しか常用漢字が含まれていないこと、共通テストの問題は常用漢字の範囲内だとしても、漢字問題に関してだけいうと教科書だけでは常用漢字の全てをマークしきれないと考える。そして、書籍の方がわずかに多く常用漢字に触れることができるのではないかと考える。しかし、私たちが受けるような共通テストでは、漢字のみの出題方法はほとんどなく、読解力や速く・正確に読む力が試される問題が多くなるという傾向になっており、共通テストに向けて漢字の基礎力の向上を目指した研究の意義がかなり薄くなってしまった。

3. 本論

(1)結果or調査(実験)結果1

4. 結論orまとめ

仮説の通り書籍の方が教科書より常用漢字の使用率が多くなった。そして、研究をしていく上で私たちが日頃から見かけるような漢字でも常用漢字ではないものが多くあった。例えば、班員の名前にある「瀬」、「佑」などだ。

また、結果の割合が30%に近いものが多いことは、読みやすい文章における、漢字と漢字以外の文字の割合が「3:7」となっていることに関係がありそうだ。

5. 展望(or 課題と展望)

共通テストでの出題傾向が読解力重視に変化してきていることを知ったので、書籍や教科書を読むことでもとの読解力からどれだけ読解力が向上するのか研究したい。

6. 謝辞

この研究を遂行するにあたり、終始適切な助言を賜り、暖かく見守ってくださった津嶋大樹先生に感謝します。また、アドバイザーの上ノ原一道様、ご指導してくださった先生方へ深く感謝を申し上げます。

7. 参考文献

<https://textmining.userlocal.jp/>
<https://joyokanji.info/checker.html>

https://www.aozora.gr.jp/cards/000119/files/624_14544.htm

「李陵・山月記」新潮文庫、新潮社
1969(昭和44)年9月20日発行

https://www.aozora.gr.jp/cards/000182/files/3216_16432.html

「西田幾多郎哲学論集3[#「3」はローマ数字3、1-13-23] 自覚について」

岩波文庫、岩波書店

1989(平成元)年12月18日第1刷発行

「水の東西」山崎正和 1977 現代の国語(東京書籍)

「消費されるスポーツ」多木浩二 1995 現代の国語(東京書籍)

「『である』ことと『する』こと」丸山真男 1961 現代の国語(東京書籍)

「ミロのヴィーナス」清岡卓行 1990 現代の国語(東京書籍)

「山椒魚」井伏鱒二 1929年 「光の窓」小池昌代

「檸檬」梶井基次郎 1925年 「舞姫」森鷗外 1890年

「ころも」夏目漱石 1914年 文学国語(東京書籍)